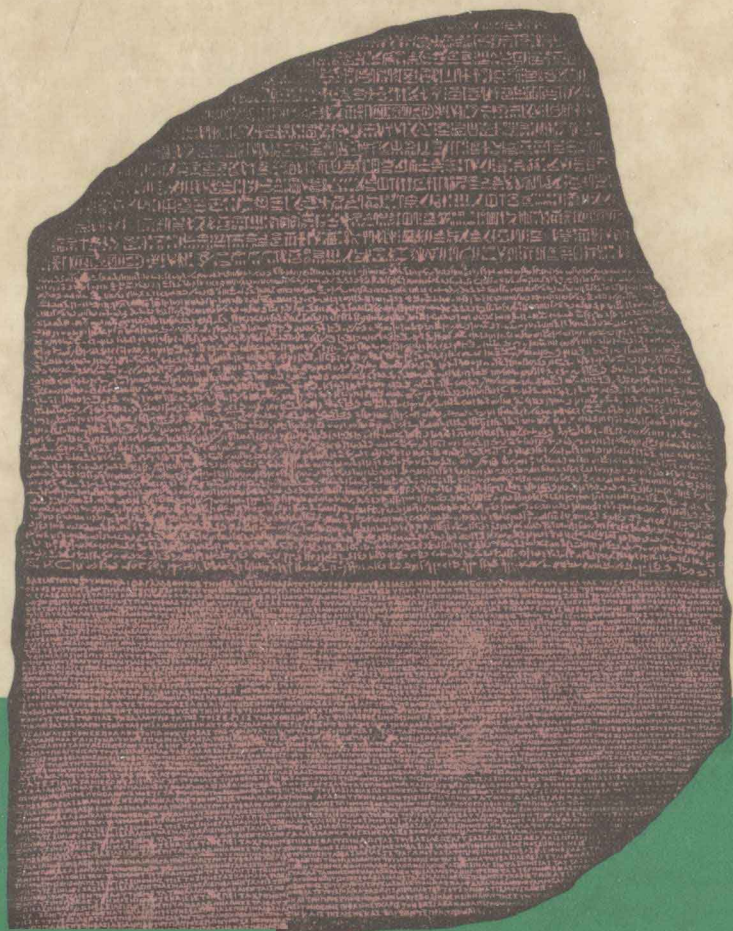


世界の辞書

竹林 滋 千野栄一 東 信行 編



研究社

世界の辞書

編集

東京外国語大学名誉教授 竹林 滋
日本女子大学教授

東京外国語大学教授 千野 栄一

東京外国語大学名誉教授 東 信行



研究社

世界の辞書

初版 第1刷 1992年



1992年5月22日 初版発行

編者 たけはやししげる ちの えいいち ひがし のぶゆき
竹林 滋・千野栄一・東 信行

発行者 長井 四郎

発行所 株式会社 研究社

〒102 東京都千代田区富士見町2-11-3

電話 編集 03(3288)7711

販売 03(3288)7777

振替 東京9-32260

印刷所 研究社印刷株式会社

ISBN 4-7674-9060-X C0087

Printed in Japan

まえがき

1922年から55年まで東京外国語大学およびその前身の東京外国語学校で教鞭をとられ、定年後は学長を勤められ、またその間『研究社英和大辞典』、『簡約英和辞典』、『ポケット英和辞典』など数々の優れた英和辞典を世に送られた岩崎民平先生のご遺族から、1985年に東京外国語大学に対して多額のご寄付があった。その後学長に就任された長 幸男先生と竹林との間で、「岩崎基金」と名付けられたこの寄付金をどのように有効に使うかということで何回か話し合いをもったが、結局外国語大学の教官の研究を外部に発表すること、つまり講演会か公開講座の費用として使用するのが最も適当である、との結論に達した。また岩崎先生は生前辞書に関して大きな業績を残された方なので、公開講座の最初に外国語大学の多くの教官が「世界の辞書」について講演するのが「岩崎基金」の性格からいっていちばんふさわしいのではないか、ということで話が落ち着いた。その結果、「東京外国語大学岩崎民平記念講座」『世界の辞書』という名で、1988年5月から89年2月まで25回にわたって連続講演会が行なわれた。講師は主として専任教官が担当したが、非常勤講師、前教官、あるいは卒業生の方にも参加していただいた。その際、講師の人選に当たったのが本書の編集委員である。

この講演会の終了後、諸先生方の講演をそのままにしておいては惜しいという声があがり、講演の主旨、すなわち、実際に当該の言語を学ぶのに、どのような辞書があるかを中心に、それぞれの状況に合わせて原稿をお願いしようということになった。ほとんどすべての先生方から原稿をいただいたのは光栄である。

その後、原稿を集めた段階になって、この講演会では取り上げられなかった諸言語についても、東京外国語大学の関係者に適当な執筆者がいる場合はそれを加えることにし、改めて何人かの先生方に執筆をお願いした。さらに、すでに死語になった言語でも学習者が見込める若干の言語も加えることとなり、千野が新たな執筆依頼の任に当たった。

本書の出版に関しては岩崎先生とのご縁の深かった研究社が引き受けて下さることとなり、執筆者を代表して、竹林 滋、千野栄一、東 信行の三人が交渉に当たり、上記のように言語を増やすこととなった次第である。編集の方針として、各々の原稿に手を入れたり、統一をとるようなことはせず、各執筆者なりの特色を尊重することとした。

以上のような経過で出来上がったのが『世界の辞書』である。

本書の上梓に当たり、改めて岩崎先生のご遺族、執筆の諸先生方、貴重な図書の撮影に当たって惜しみなく協力してくれた東京外国語大学図書館、早稲田大学図書館、出版の労をとられた研究社に感謝の意を表わすものである。また、本書を担当した研究社辞書編集部の小沼利英氏、東邦大学講師猪塚 元氏にもお礼を申し上げる。

1992 年 3 月 25 日

編集 委員

竹 林 滋
千 野 栄一
東 信 行

目 次

	執筆者	
辞書と言語学	千野栄一	1
国語辞典	金田一春彦	5
「国語辞書」をめぐって	国松 昭	30
朝鮮語の辞書	菅野裕臣	48
中国語の辞書	輿水 優	70
インドネシア語の辞書	佐々木重次	82
タイ語の辞書	松山 納	98
ビルマ語の辞書	奥平龍二	110
ベトナム語の辞書	川口健一	132
ウルドゥー語の辞書	麻田 豊	142
ヒンディー語の辞書	町田和彦	151
チベット語の辞書	星 実千代	159
モンゴル語の辞書	小澤重男	173
トルコ語の辞書	林 徹	183
ペルシア語の辞書	黒柳恒男	189
アラビヤ語の辞書	内記良一	209
ヘブライ語の辞書	矢島文夫	226
東アフリカ諸語の辞書と参考書	西江雅之	232
エスキモー語の辞書	宮岡伯人	242
フィンランド語の辞書	松村一登	253
ハンガリー語の辞書	岩崎悦子	259

ロシア語の辞書	磯谷 孝	264
ポーランド語の辞書	坂倉千鶴	292
チェコ語の辞書	千野栄一	299
ルーマニア語の辞書	倍賞和子	308
ポルトガル語の辞書	池上岑夫	314
スペイン語の辞書	原 誠	334
イタリア語の辞書	秋山余思	359
フランス語の辞書	田島 宏	380
独和辞典入門	在間 進	409
ギリシャ語・ラテン語の辞書	沓掛良彦	428
古代教会スラブ語の辞書	千野栄一	434
英国の辞書	東 信行	439
米国の辞書	東 信行	473
英和辞典	竹林 滋	505
和英辞典	小島義郎	532

辞書と言語学

千野 栄一

辞書は言語と言語外現実の接点にある。

辞書を構成する言語の単位は語で、語以下の単位には音素であれ、弁別的特徴であれ、形式に対応する意味がない。語以下の単位で意味を持つ唯一の例外は形態素で、この形態素は「意味を持つ最少の単位」と明確に定義され得るが、その意味は多くの場合、言語外現実に対応するものがない。英語の語である teacher は teach-er- ϕ [ϕ はゼロを示し、teacher が一人であることを示す。cf. teach-er-s] と分析されるが、このそれぞれは言語外現実に対応するものがない。もっとも形態素イコール語の場合はこの限りではなく、日本語の「山」を示す yama は形態素であると同時に語であり、言語外現実の「山」を示している。

語という単位は、文と共に、伝統的な言語学で一番よく使われてきた単位である。しかし、語とは何かを定義することはそう容易ではない。

語は言語学においてそのいろいろな分野で単位として登場してくる。語はまず語形成の一単位であり、語の形の変化は形態論で取り扱われる。語はまた文における役割を担うものとしては統辞論における単位となり、そしてさらに言語の語の集合としての語彙を研究する語彙論の対象にもなる。従ってそれらのいくつかの立場から語は研究され得る。

世界には非常に数多くの言語があり、その一つ一つの言語により、語のあり方は大きく異なっている。ある言語では語は形態素に限りなく近くなり、またある言語では文に限りなく近くなる。前者の代表としてよく取り上げられるのは古典中国語であり、後者の代表としてよくあげられるのはエスキモー語である。すなわち語の大きさは次のように示され得る。

形態素 $\angle$ 語 $\angle$ 文

語は言語記号として形式と内容の二つの面を持つ。

この二つはそれぞれ複雑であるとはいえ、形式の複雑さは内容の複雑さに比べればそれ程ではない。語根、接辞、語尾、その他の要素が、単独であるいは組合わされて語が形成される。この組合わされ方はそれぞれの言語によって異なり、それぞれに特色がある。接辞にしても、ある言語は接頭辞を好み、ある言語は接尾辞を好む。なかには接中辞が用いられる言語もある。語根一つだけがむき出しの語の多い言語もあれば、語根をいくつもつなげる言語もあり、形態素が意味を持たない機能だけを示す語尾を多用する言語もある。これらの語の形成法が一つの言語で混って用いられ、一つの形成法だけで語が形成される言語はない。どのような形成法があり、そのいずれがどのような割合で用いられるかによって、その言語の語形成の特徴が現われてくる。

語の形式もいろいろあって複雑だとはいえ所詮その程度は知れていて、そのことが困難を起すことはあまりない。

それと比較すると語の内容、すなわち意味は限りなく無限に近い多様性を示す。語をその意味の面から記述し、一定の限界をもうけて、整理分類したものが辞書である。

辞書そのものを取り扱う前に、辞書の素材である語を扱う言語学の分野が語について何を明らかにしているかを述べることにしよう。実をいえば、何を明らかにしているかより、何が明らかでないかを明らかにしている方が多い。この事実は言語学の現状を示しているといえよう。

語彙論ではまず語とは何かの定義から始まる。しかしすでにここにもう問題があり、一つの言語において語とは何かを明確に定義することはかなり難しい。ましてやすべての言語に使える単位としての語の定義はない。従って語と語以外のものの区分は曖昧なまま、辞書作りの作業は始められ、辞書の項目の中には語でないものも入ってくることになる。例えば、一つのまとまった概念をいくつかの語で示すことはよく知られている。

意味の面からの、単位としての語の限界に問題を提供するものに「多義性」があり、一つの語の多義とみなすか、別の語彙とみるかはそのまま辞書での問題としてはね返ってくる。

語彙がはたして構造をなすのか、もしなすとすればどのような構造をなすのかは語彙論の一つの大きなテーマであり、それと関連して同音意義語、異音同義語の問題、反語などの問題が出てくる。

意味や、形態と共に、文における機能が問題となって語が区分されるのが「品詞の分類」で、これまた語彙論の大きなテーマである。そしてこの品詞の

分類は辞書においてもその重要性が認められ、その表示がなされるのが普通であるが、品詞の分類には各言語によって異同があり、単一で統一的な品詞論はない。

語彙を扱う言語学の分野で直接辞書に関係するのは辞書編纂学である。この分野には理論的部門と実用的部門があり、それぞれは密接に関連している。このうち実用的部門は長い歴史を有し、数多くのタイプの辞書を人類は作り上げている。理論的辞書編纂学は今世紀に入ってから成立した新しい学問で、巨視的に見た辞書の分類や構造、微視的に見た辞書の項目の抱える問題を扱う。

言語に関する業績のうち、もっとも実用性が認められ、もっとも広く用いられているのが辞書である。辞書は語を記述しているが、語をどのような立場から記述するかによっていろいろな辞書ができる。また、語は記号体系の中でもっとも数が多い記号であるので、語の集合を常に全面的に取り扱うことはできず、一定の制限を数の面から行うのが通例である。

現在辞書は上記の二つの制限を加えられて種々なものが出版されており、分類すると以下になる。

辞書が与えられた語を他の語で置き換えて説明するのか、その語の意味について説明するかによって分類され、しばしば後者には事典(業界用語でコトテン)という名称が与えられている。前者が言葉の辞書であるのに対して、後者は事柄を説明する辞書である。後者の代表的な辞書が百科事典といえよう。

一つの言語の辞書の場合は、二言語の辞書、例えば、英和辞書より、辞書と事典の差は小さくなる。二言語の場合では、一方の言語での語に近い、もう一方の言語の語をあげればよく、純粹に語学的であり得る。一つの言語の辞書の場合でも、言葉の説明と、事柄の説明は違うし、そこに取り上げられる見出しの語は大きく異なっている。一般に言葉の辞書がより頻度数の高い、よく使われている語を集めているのが通常であるのに対して、事典は事典の性質上、固有名詞をはじめ、*flora* や *fauna* など、言語学的語彙として周辺にあるものの方がよくあげられている。近年は二言語の辞書の場合でも言葉の辞書と事典との間の境が明確でなくなりつつあり、言葉の辞書の中に固有名詞その他が多く含まれている場合が増えつつある。

辞書を分類するもう一つの基準はすでにその区別が辞書と事典の説明にも出てきた、一言語の辞書か多言語の辞書かによる、そこに出てくる言語の数による基準である。具体的な例でいえば、国語辞書か英和辞書かの違いである。この場合、英英辞書は日本人にとっては外国語の辞書であるが、英語を母語とす

る人にとっては国語辞書ということになる。

三つの言語、四つの言語の辞書もないわけではないが、このような辞書の場合、辞書の取り扱う分野を限定してあるのが普通で、「五ヶ国語対照医学辞書」というように分野の面での制限がつけ加えられている。

二言語辞書でも多言語辞書でも母語、すなわち日本語が目的言語になるか、そうでないかで、二つに分類され、例えば、英和、和英のように二つに分かれる。一般に母語で目的言語に訳をつけた辞書の方が、その逆より多い。具体的にいえば、英和の方が和英より多く、言語によっては和×語がまだ存在していないことがある。

辞書はまた配列の仕方によっても分類され abc など、文字の順によるものもあれば、概念の別によって配列されるものもあって、例えば、人間、社会、自然...というような順に配列されるものもある。

辞書をその扱う対象によって分類すれば、ここにも無限ともいえる対象がある。哲学辞典もあれば、SF 辞典もあり、魚類辞典もあり...と限りない。そこで言語だけを対象とする辞典を見ると、そこでもその種類は多い。

言語を対象としても、その表現面を扱うものとして、発音辞典もあれば、正字法辞典もあり、語の特徴を扱うものにも方言辞典、語源辞典、類語辞典、同義語辞典、借用語辞典、外来語辞典...とその種類は多い。

その中でとりわけ種類が多いのは母語と他の言語との翻訳辞書で、この本で取り扱うものの多くはまさにその意味での辞書である。

日本語とその他の言語の辞書について巨視的に眺めてみると、地球上に存在する8千とも1万ともいわれる言語の数と、辞書のある言語との数の大きな差に注目していただきたい。そして、辞書のある言語と、日本語との対訳辞書のある言語の数にも注目していただきたい。その多くがこの本で取り扱われているものである。まして、日本語が出発の言語である和×語辞書数は実に少ないことはさらに目をひくことと思える。

このような辞書のあり方は世界における日本のあり方、位置を示すものとしてわれわれが一考するに足る事実と思われる。

(東京外国語大学教授)

国語辞典

金田一春彦

1. 辞典の種類と沿革

戦前、私が中学生だった頃、また中学校の国語の教師をやっていた頃、国語の辞典というものには二種類のものがありました。一つは、今の国語辞典、つまり日本語の単語が五十音順に並んで漢字や語釈が一々書いてあるもの、もう一つは漢和辞典というもので、漢字があがっていて、いちいちその読み方と熟語の解釈が載っていたものです。生徒は皆その二種類の字引を買い、また先生としてもその二種類の字引を買わせたものです。

ところが、戦後40年も経ってみると、漢和辞典の方は影が薄くなってしまってもっていない人もいます。これは漢文という授業がなくなったこと、そのほかに、戦前に比べて難しい漢字を読む生活が少なくなったこともあるのでしょう。漢和辞典は、字を探し出すのがめんどうで、あまり親しみを感ぜませんが、今のようになってみると、多少感慨を禁じ得ません。しかし、そもそも日本で字引が初めて出来たときは、漢和辞典の方がまず出来たものらしい。

平安朝の初めに、例えば、『新撰字鏡』というのが出来ましたが、これなどは漢字が並んでいて、読み方と解釈が書いてあったものです。当時の日本人にとっては、一番大切な勉強は中国の古典を読むことでしたが、それには漢和辞典がまず必要でした。それはちょうど現代、字引というとまず英和辞典が必要だというようなものです。当時は“国語辞典”などというものは、全然必要がなかったのです。

で、国語辞典の方は、鎌倉時代の初めになって、やっと出来ました。『色葉字類抄』というものがそれでしたが、当時は日本語がイロハ順に並んでいました。ただし、これには解釈がついていない。この字引は何のために作られたかと言いますと、言葉の意味を知るために引くというのではなく、この言葉に漢字を宛てるとどのような漢字で書くかという、漢字の書き方を知るために、日本語をイロハ順に並べたものでした。

では、解釈を書いた辞典はいつ出来たかと言いますと江戸時代です。谷川士清(清)という人の『和訓栞』というのがそれですが、これはその時代の現代語を並べて解釈を加えたものではありません。その時代の人間にとっては、現代

語の解釈など全然必要はないと思っていたのです。ただ、平安朝の古典を読むときには字引が必要だということで出来たので、古語が並んで解釈と用例がそえてある。現代で言ったら、まず古語辞典の方が先に出来たことになります。

そうすると、現代語について解釈をした字引はいつ出来たかという明治9年で、有名な大槻文彦博士の『言海』が出来たのが最初です。これが後の国語辞典すべての模範になったと言われています。今この本を見ますと、当時は漢語がまだそれほど多く出来ていなかった。ことにカタカナで書かれる、いわゆる外来語の類は非常に少なかったもので、純粋な日本語が並んでいる。今これを見ると実に綺麗な感じがします。

例えば、「あ」の字を見ますと、「あかつき(暁)」とか「あけぼの(曙)」とか、あるいは「あきかぜ(秋風)」、「あさつゆ(朝露)」、「あさじゅう(浅茅生)」とか、そういう言葉が並んでいる。

私どもが今、英語の辞典などを見てこれを見ますと、大変感じが違います。皆さんは英語の字引というとうとういうものを思い浮かべられますか。私など、英語の字引というと、例えば「欺く」とか「敗(負)る」とか、「突然の」とか、あるいは「後の方に」とか「絶対的な」「抽象的な」...こんな単語が並んでいる字引が頭に浮かんできますが、『言海』はそれとはおよそ違って、具体的な事物、それも自然を表わすもの、ことに植物の名が多かったというのが大きな特徴です。そういった字引が出来ました。

中には奇抜な言葉も載っていて、例えば、「傘驚き」という単語があがっている。どういう言葉かと思って語釈を読んでみますと、「馬の前に突然傘を払げると馬が驚くこと」——確かにそういうことはあるだろう、と思いますが、こんな言葉を入れるとはのんきな時代だったと思います。

語釈もなかなか面白くて、「さつまいも」を引くと、「賤民これを常食とす」——いかにも時代を表わしています。「猫」の條には「盗癖あり」という一句があって、猫好きの芥川龍之介から攻撃を受けたものでした。

2. どういう語を収録するか

さて、日本語の字引はどういう体裁になっているか。第一の問題は収録語彙です。日本語の字引ならば、日本語として使われている単語がすべて入っている。これが理想ですが、日本語の場合には、これが非常に難しい。アメリカ人の日本文学者サイデンス・ステッカーさんがいつか書いていらっしやった。

私は例えば川端康成氏の『伊豆の踊り子』を読んで、あれはごく易しい作品だと思っていた。ところが、あの中にはどんな日本語の字引にも出てい

ない単語がいくつもある。

と言っておられました。どんな言葉がそうかと言うと、例えば「旅慣れた」は、どの辞典にも出ていないという。それから、「風呂敷包み」も出ていない。「四十女」「退屈しのぎ」「菊畑」「花道」...など、みんなこの字引にも載っていないそうです。

つまり、そういう字引に載っていない単語が日本語にはたくさんあるのです。なぜか。これは、日本語という言語は、そもそも単語の数が多いのです。

岩淵悦太郎さんの『現代日本語』で読みましたが、フランス語というものは、2千の単語を覚えれば、日常の会話は83%理解できるそうです。すばらしい言語だと思いますが、日本語は2千語覚えても、日常会話は60%ぐらいしか理解できない。フランス語は5千語覚えると、会話の96%が理解できる。ところが、日本語は会話の96%を理解するためには、2万の単語を覚えなければいけない。

それほど日本語は単語の数が多いのだそうです。したがって、日本語の字引はどうしても載せる語彙の数が増えてしまいますが、なぜ日本語がこんなに語彙の数が多いかといいますと、まず日本語は新しい言葉が作りやすいからです。

まずどんな外国の言葉でも、カタカナで似た発音で書いてしまうと簡単に日本語として使われる。コーヒーでもアイスクリームでも、カタカナで書くとそのまま日本語になります。もし動詞的な意味をもつものならば、「スタートする」とか「アタックする」とか、「する」をつければ日本語として使える。形容詞的なものは「デリシャスな」とか「シックな」と「な」をつければよい。

こういうと、どこの言葉もそうだと思いたくなりますが、なかなかこうはいきません。エスペラントなどは他の国語から採り入れるのが大変だそうです。名詞は全部、アルファベットの「o」で終わらなければならない。こういう決まりがありますから、例えば、「オペラ」などという言葉のエスペラントにしようとしたら、本当に困るそうです。オペロとでもやるのかしれませんが、とにかく、どこの言語にも使われていない新しい形の言葉を増やすことになるので批判が多いようです。

中国語もなかなか新しい言葉を増やしにくそうです。「野球」や「庭球」のようなものは意味を考えて漢字を組み合わせるという手がありますが、いちいちこうやるというのは大変ですから、その発音を表わす漢字で書こうとすると、カタカナとちがって漢字が持っている意味が邪魔になる。例えば、チョコレートを書こうとすると「巧克利」となる。これでは何か精力剤か何かのようで

す。タクシーは「的士」と書くそうですが、私などこれを見ると、弓で的を射る侍か何かのような気がします。そういう風でなかなか新しい言葉が入らないのです。

日本では、その他に、日本語の中で複合語が作りやすいのです。さきほどの「風呂敷包み」とか、「旅慣れる」とか「菊畑」とか、ああいうことはどんどん新しいのが作れる。作ると、これがまたすぐ意味がわかりますから、そういったのがいくらでも出来る。「娘」という言葉が一つあると、「町娘」とか「村娘」とか「東京娘」「大阪娘」など、いくらでも出来てしまう。これは、中国語ではできるでしょうが、ヨーロッパの言葉、フランス語なんかなかなかあまりできそうもない。

日本語はさらに、動詞と動詞を結びつけることができます。「咲き揃う」とか「咲き乱れる」。これは日本語に近い、朝鮮語などではできないらしい。その他に、日本語には接頭語というのがあって、例えば、「小路」とか「素早い」とか「薄暗い」とかどんどん出来る。この接頭語があるというのは、英語などにはあるので、珍しくもないと思う人が多いかと思いますが、日本語と同じ系統だといわれる、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語にはないそうです。村山七郎さんなどは、接頭語があるということから、日本語は南方系の要素が入っている、と言っておられますが、そのようなものがたくさんあります。

次にまた、漢語というものは、漢字が一つ一つ意味をもっているのをこれを組み合わせると、たくさんのことが言えます。今、自動車全盛の時代ですが自動車に関することは、「車」という字が一つあれば、どんな言葉でも作れます。前を走っている車なら「前車」と言えるし、向こうから来る車なら「対向車」です。新しい車は「新車」、少し古くなった車は「中古車」、外国の自動車は「外車」であり、日本の車は「国産車」です。

私はいつかタクシーに乗っていましたが、運転手さんが、電話で、「ジッシャ」なんてかと言っている。ジッシャというのは、私の編集した辞典には載っていないので、どういう意味かと聞いてみたんです。運転手さんが言うには、お客が乗っていない車は「空車」だ。だから、お客が乗っている車は「実車」というという答えでした。

私が、もっと面白いと思ったのは、いつか、ある電気機械の会社から講演を頼まれましたが、その朝、電話がかかってきて、「ただ今、ソシャを差し向けました」と言う。何が来るのだろうと思いましたが、これは「粗車」という言葉を作ったのでしょうか。もっとも待っていたら、立派な車が来ました。

日本人は、さらに、カタカナの言葉でも組み合わせて新しいのをどんどん作

ります。私どもは、例えば、他の人が、イメージ・アップとか、イメージ・ダウンとか言う、英語をそんな風にどんどん使ってえらいものだなあと思っていますが、これは全然、英米人には通じないそうです。日本人が勝手に作った言葉だそうです。『言語生活』という雑誌に、アメリカの人が書いておりましたが、日本に来て一番困るのは、そういった日本人が勝手に作った、カタカナの言葉だそうで、レモンスカッシュとか、トマトジュースとか、チョコレートパuffとか、ああいう日本語が一番難しい、と言っていました。私などは、アメリカへ行っても使えると思って一生懸命覚えようとしたのですが、全然だめだそうで張力が抜けました。

そのように新しい言葉が簡単に作られる、そういったことから、日本語の語彙体系は非常にたくさんになって、結局、辞典には載らない単語がどうしても出てきます。それでは、どういう単語が載らないか、ということになりますが、例えば、分析して意味がすぐにわかるというふうな言葉、これは載らない。さきほどの、「町娘」「村娘」などや、昔「島娘」「山娘」など歌の題にもなっているが、こんなのは載りません。

もっとも、そうだからと言って、むやみに省くわけにはいけないので、類推の利かないものもあります。例えば、「虎狩り」といえば、虎を狩りに行くことですが、「鷹狩(り)」というのは、鷹を狩りに行くことではない。鷹を使って小鳥を狩ることです。こういうのは、やっぱり載せないわけにはいけない。あるいは、「茸狩り」といいますと、きのこを取りに行くことです。古典に「紅葉狩(しむぎ)」と出てきますと、紅葉の枝を折ることではない。紅葉の見物に行くことだそうです。ですから、むやみに省くわけにはいきません。が、一応分析して意味が素直にわかるものは、結局、省かれてしまう。

それからその他に、一つの言葉がありますと、この形が崩れて行った形を使っているものがあります。こういう形も載っていません。例えば、父親のことを「お父(ぢ)さま」と言います。が、それを「お父さん」とも言う。あるいは、「お」をとって「父様」とも言い「父さん」とも言い、両方とも使います。子供ならば「お父ちゃん」と言ったり、「父ちゃん」と言ったりしますが、これをいちいち字引には載せません。おそらくこういうのは、外国人は困る人がいるかもしれない。「お母さま」でも「お兄さま」でも「お姉さま」でも、そういった類が、たくさんあります。

それから、擬態語・擬声語というのがありますが、これが、動詞のように活用するという例でしょうか。例えば、「ころころ」という言葉、これは載りそうです。ころがる様子です。ところが、「ころり」という形は、載るかどうか。

「ころっ」とか「ころん」とかいう形もたくさんあります。これ、意味がみんな違います。「ころころ」というのは、続けざまにころがる様子です。「ころり」というのは、ころがって止まる意味です。したがって、「ころりころり」と言いますと、ころがっては止まり、ころがっては止まり、ということです。「ころっ」というと、ころがりかける意味、「ころんころん」といいますと、弾みをもってころがって行く様子です。

擬態語ならば、「くるくる」でも、「ごろごろ」でも、みんなそういう形をもっています。こういうものを、いちいち全部載せるわけにはいきません。これは終戦前の話であります。大西雅雄さんという英語の学者がいて、この人が、日本語の辞典の編集をしたときに、今までにない字引を作ってやろうというわけで、そういうものを全部入れようとした。最初のア行にはそういうものが少ないからよかった。「あっさり」とか「うっすら」「うすうす」などを入れている間はよかったのですが、カ行に入って、「からから」「からり」「からんからん」などとやり出したら、とても大変なので途中でやめることになりました。そういったものは、どうしても、見出しには出せない。これはやむを得ないのではないかと思います。

今、見出しには、どのような言葉が出てくるか、という問題でしたが、これは原則として、一般の単語が並ぶはずであります。複合語は出ないこともあります。複合語ではない一般の名詞とか動詞とかは全部出るはずであります。その他に、例えば、『言海』にこれは出ていませんが、現代の字引ですと、造語成分——アメリカ言語学で言ったら、モルフィームですが、これを全部出すようになりました。

私が関係した三省堂の『国語辞典』ですが、その第1ページを見ますと、カタカナの「ア」が見出しに出ていて、「造語」とあります。これが造語成分、モルフィームです。例えば、「亜」というアはアジアの意味のアという造語成分で「東亜」とか「欧亜」とかいう言葉を作ります。アフリカを意味する「阿」という造語成分もある。「アイ」という造語成分もあって、「合」と書きますが、他の単語といっしょになって、「色あい」とか「空あい」とかいう言葉を作って用いられている。こういったものは単語ではないが、やはり載せるのが日本語の解釈には都合がいいというわけです。

接頭語や接尾語も単語ではありませんが、やはり、載せることになります。「亜硫酸ガス」の「亜」や、「相済まぬ」の「相」も、どうしても必要です。

3. 見出しの立て方